多様な学び研究会
―「自主夜間中学について考える連続研修会」第１回を起点として―

多様な学び研究会代表・宇都宮大学国際学部教授　佐々木　一　隆
多文化公共圏センター研究員　田　巻　松　雄

研究会の目的

多様な学び研究会は、国際学部などの関係者が集い、多様な学習者（義務教育未修了者、形式卒業生、学齢超過の外国人、学齢児童生徒等）に貴重な学びの場を提供する自主夜間中学等について研究する会です。すなわち、多様な学びの場について研究を行い、その普及に資する活動を目的としています。

研究会成立の背景とこれまでの活動の概要

本研究会成立の背景とこれまでの諸活動の概要をまとめると以下のようになります。

本研究会は2022年５月の多文化公共圏センター運営委員会で設立が承認され、センターの一事業として認定されました。現構成員は、研究会代表の佐々木一隆国際学部教授、田巻松雄宇都宮大学名誉教授、センター員のスエヨシ・アナ准教授、大学院生の鈴木アリサ氏です。国際学部等の現職／退職教員や在学生／卒業生などが該当します。現構成員は、とちぎ自主夜間中学やHANDS事業の諸活動や組織運営の経験と実績を有しており、これらの経験・実績を活かして研究を進めています。また、関連する研究グループとして、科学研究費補助金基盤研究（A）「外国人生徒の学びの場に関する研究」（研究代表者：田巻松雄、課題番号19H00604）があります。

昨年５月の運営委員会では「夜間中学研究会（仮）」としていましたが、その後、研究対象を拡げる方針をとり「多様な学び研究会」という名称にしました。こうして、本研究会は学術的な視点から、夜間中学をはじめとして、広く多様な学びの場における生徒を応援する方法や内容を検討し、その活動報告を多文化公共圏センターHP等により情報発信していくこととなりました。

2022年９月のセンター拡大運営委員会では、本研究会より下記の「自主夜間中学について考える連続研修会」（仮称）の開催に関する新たな提案を行い、基本的に承認を得ました。

記

○事業名：「自主夜間中学について考える連続研修会」（仮称）の開催
○共催：センター多様な学び研究会、とちぎに夜間中学をつくり育てる会、田巻科研グループ
○目的：全国に自主夜間中学および関連団体（以下、自主夜間中学と一括）は約40あると思われる。公立夜間中学の未設置地域を中心に自主夜間中学は多様な学習者（義務教育未修了者、形式卒業生、学齢超過の外国人、学齢の児童生徒等）に貴重な学びの場を提供している。しかし、自主夜間中学に関する研究は極めて少なく、また、自主夜間中学関係者間の情報・意見交換の機会も限られている。さらに、社会的認知度がまだまだ低い中で、自主夜間中学の意義や課題を広く社会に発信していく必要がある。このため、自主夜間中学関係者による実践報告と問題提起を軸とする研修会を定期的に開催していく。
○方法：ハイブリッド開催（宇大での対面開催およびオンライン発信）

○予算：田巻科研
○計画：2ヵ月に1回程度開催、年度内3回開催
12月3日（土）夜間　第1回（あるいは第2回）研修会開催確定
話題提供者：
工藤慶一（札幌自主夜間中学遠友塾）
竹内悦子（ちば自主夜間中学）
年度内３回開催に向けて関係者と調整中
＊多文化公共圏フォーラムの一環と位置付ける。
＊研修会の記録は年報に掲載あるいは単独の報告書として発信する。

なお、本連続研修会を多文化公共圏フォーラムの一環として位置付けるには、一般公開が求められることを確認しました。また、髙橋センター長より研修会の記録は年報に掲載可能であることをご教示いただきました。その後、一般公開については、とちぎに夜間中学をつくり育てる会の役員会にも報告して検討した結果、オンラインにより一般公開することになりました。すなわち、12月３日の連続研修会は「第19回フォーラム」として位置づけられることになりました。

2022年11月のセンター運営委員会では、本研究会がさらに下記の新たな提案（「多様な学び相談コーナーの設置」）を行い、基本的に承認を得ました。

記

○事業名：多様な学び相談コーナーの設置
○主催：センター多様な学び研究会（「とちぎ夜間中学をつくり育てる会」協力）
○目的：義務教育を十分に受けることが出来なかった人（義務教育未修了者や形式卒業生）、高校進学を目指す学齢超過の外国人、不登校の児童生徒等、様々な学習ニーズを持つ人々への情報提供と就学相談を行う。HANDSとの連携を通して、学習支援も検討する。多様な学びの場をつくり育てることを目的に活動する「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」の協力を得る。
○内容：定期的な相談コーナーの開設（毎週木曜日14-20時、多文化公共圏センターでの開催を予定）
○予算：必要としない。

委員会では、相談コーナーの場所について施設の有効利用に資するという点でセンター会議室を利用可能である旨の示唆がありました。終了時刻が20時までなので、施錠などの管理はどうするかという質問もありました。来年１月以降から開設の予定があり、現代表や他の専任教員が施錠の管理を行うようにすると回答し、了解されました。

以上から、本研究会の任務は、多様な学びについて、学術的な視点から研究を行ってその普及に資する活動を行うとともに、教育相談と学習支援との有機的な連携を図るという機能も備えた実践を進めていくことになりました。

こうした研究会成立とこれまでの諸活動を経て、2022年12月３日に本研究会としての実質的な活動開始となる「自主夜間中学について考える連続研修会」第１回が開催されました。詳細は後述する「活動報告」に譲ることにします。

多文化公共圏センター諸事業の中での位置づけ

今年度、多文化公共圏センターは事業のグループ化を図り、国際協力・グローバル課題、内なる国際化／地域連携、異文化理解という互いに一部が重なる３つの類型に分類することになりました。

多様な学び研究会の位置づけとしては、基本的に「内なる国際化／地域連携」に属すと考えますが、「異文化理解」の面も見られます。このため、以下の図が示すとおり、HANDS事業と日光プロジェクトの中間に位置づけられます。

多様な学び研究会

活動報告:「自主夜間中学について考える連続研修会」第１回の詳細報告（2022年12月３日）

以下の活動報告は、とちぎに夜間中学をつくり育てる会の代表で、田巻科研グループの研究代表者でもある田巻松雄氏に提供いただいた詳細な報告に基づくものです。特に、氏は研修会の前半に行われた札幌、千葉、奈良の関係者からの「実践報告と問題提起」の部分に焦点をあて、後半の座談会にも触れていますが、基本的に内容も文体も氏の原文のまま掲載させていただきましました。ここに感謝の意を表します。

2022年12月３日、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター多様な学び研究会、とちぎに夜間中学をつくり育てる会、田巻松雄研究グループの共催で、「自主夜間中学について考える研修会」第１回がハイブリッド形式で開催された［会場は国際学部大会議室での対面とZoom］。「多様な学び研究会」は今年度センター事業として立ち上がった研究会で、多様な学びの場についての研究とその普及に資する活動を目的としている。「つくり育てる会」は自主夜間中学の開設を当面の目的として発足し（2021年３月）、2021年８月にとちぎ自主夜間中学を開設した。田巻研究グループは、外国人生徒の学びの場に主な関心を向けながら、多様な学びの場の意義と課題についての共同研究を行ってきている。

自主夜間中学は、公立夜間中学未設置地域を中心に全国で約40あると思われる。自主夜間中学は、自主であることの自由さや柔軟さを活かした学びの場を追求しているが、その活動内容や運営の仕方（スタッフ・会場・資金）は様々である。一方、自主夜間中学は、全体的に、ボランティア組織であるがゆえに、スタッフ・会場・資金の確保が容易ではなく、運営面で厳しい現実に直面している。このため、情報共有や学び合うことが重要となる。しかし、自主夜間中学に関する研究はまだ極めて少なく、情報共有や学び合う機会も限られている。このような問題を共有することで、自主夜間中学について定期的に学んでいく場をつくっていくこととした。まだ１年の経験しかないとちぎの自主夜間中学関係者にとっては、他の自主夜間中学から学んでいくことが大きな目的となる。

記念すべき第１回は、「札幌、千葉、奈良からの実践報告と問題提起」と題して開催した。前半は、札幌、千葉、奈良の関係者から実践報告と問題提起をいただいた。後半は、３名の報告者に加え、川村滋（とちぎ自主夜間中学宇都宮校　校長）、石林正男（栃木自主夜間中学、栃木　登校拒否を考える会）、飯村慎一（光陽エンジニアリング代表取締役会長）に参加いただき、座談会形式で意見交換をした。

・**札幌遠友塾自主夜間中学**：工藤慶一（北海道に夜間中学をつくる会、札幌遠友塾自主夜間中学）。工藤は、まず、2020年国勢調査により、北海道における義務教育未修了者数が全国47都道府県で最多の58,444人にのぼり、70代以上が９割を占めるという衝撃的な事実を紹介した。そして、その歴史的な背景を、1945年３月の東京大空襲直後に閣議決定された「都市疎開者の就農に関する緊急措置要綱」と同年11月の「緊急開拓事業実施要項」による戦中・戦後の開拓に求めた。加えて、国勢調査では捉えられない膨大な形式卒業生、外国から日本へ来た人た

ち、病のために就学の機会を得られなかった人たちなどが夜間中学の門をたたく現実を踏まえ、夜間中学設置の必要性を強調した。

札幌遠友塾は、1990年４月、約100名の受講生が集う中、「学ぶことが生きることの証と喜びになる」をスローガンに活動を開始した。毎週水曜日夜間の学習活動を32年間続けてきている。これまで延べ2000名を超える方たちが学んできた。

工藤の実践報告で特に興味深かったのは、学習の様子、学習者の声などに注意を払いながら、運営方法の改善を図るために関係者が議論を積み重ねてきていることである。例えば、授業終了後に教室他使用場所の掃除を全員で行った後、15分程のミーティングを行い、一人一人の受講生の様子や、良かったこと、反省すべき点を出し合い、次回に生かす。各クラスのミーティング報告は、一斉メールで行う。毎月第３土曜日の夜に、スタッフの全体会議を行い、あらゆる報告・相談・決定がなされる。全体会議の１週間前には事務局会議（代表・事務局長・クラスチーフ・教科チーフ・会計・広報の13名で構成）が行われ、全体会議への提案議題を決めてレジュメを作成する。議長は事務局員の持ち回りで行う。全教科について11月アンケート調査、12月に結果をまとめ、各クラスミーティングで検討、教科ミーティングの内容を加えて、１月全体会議に報告し相談する。各教科の授業内容、運営方法、受講生の個々人と向き合う姿勢などについて、共通のまな板に載せて真剣に議論し、問題点を改善するための組織作りが実践されてきたと言える。「30年もこうしたことを繰り返すと、あるべき姿に向かって変身をとげ続け、マンネリに陥る危険性が少ない」。

札幌では、2022年４月に札幌市立星友中学校が開校した。市立では初めての単独校としての公立夜間中学の開校である（2022年９月１日現在89名の在籍生）。６月に開催された「つくる会」の総会では、札幌遠友塾と星友中学校の相互交流を通じて共存を図っていくことが決議された。工藤は、公立夜間中学設置後も常に「教育の原点」を発信しうる自主夜間中学は必要と強調する。座談会のなかで工藤は、「出来ることから始める」ことと「退かない覚悟」の大事さを訴えた。

・ちば自主夜間中学：竹内悦子（千葉夜間中学をつくる会）。竹内によると、2006年、千葉市第３次５か年計画に公立夜間中学設立が記載され、千葉市教育委員会内に夜間中学校設置検討委員会が立ち上がった。しかし、検討の結果、夜間中学設置には至らなかった。その後、2015年に文部科学省が形式卒業者の学ぶ場として、夜間中学を認める通知を出したことが大きなきっかけとなり、市民ネットワークちばに夜間中学プロジェクトを設立した。同プロジェクトは千葉市教育委員会と意見交換会を続けたが、千葉市が公立夜間中学設立に消極的な姿勢を変えなかったため、自分たちで動きをつくれたらと自主夜間中学立ち上げを決めた。2018年５月に「ちば夜間中学をつくる会」を設立、数か月の準備を経て、同年10月に第１回目の「ちば自主夜間中学」を開校した。千葉市では、2021年３月の市長選で公立夜間中学を公約に掲げた現市長が当選し、５月26日の千葉市教育委員会議で、2023年４月に千葉市立真砂中学校の分校として夜間中学設立が決定した。

竹内は、自主夜間中学立ち上げから公立夜間中学設立決定までの経過を詳細に紹介したうえで、千葉自主夜間中学の現状と課題を語った。毎回、対面学習は学習者・スタッフ合わせて45～50名、オンライン参加者は10名前後で推移。このところ外国人の学習者が増えている。大きな課題としては、多様なニーズに応えられるスタッフの充実、若い世代のスタッフ不足、運営

費の確保（賛助金、寄付、助成金の他、地域のバザー等に出店）の３点が挙げられた。

ちば自主夜間中学の特徴としては、千葉市教育委員会や他団体との連携を重視している点が挙げられる。千葉市教育委員会とは、年１～２回の意見交換や自主夜間中学開校への名義後援などがあるほか、現在、会場について近隣の公立小学校活用の提案を受けている。他団体との連携では、千葉市国際交流協会（外国人支援の補助金をいただく）との連携のほか、フリースクール運営団体等とも意見交換をしている。松戸市、柏市、千葉市の自主夜間中学で連携会議を開催する予定がある。

竹内は、公立夜間中学開設に向けての課題をいくつか述べた。市教委の内部だけで議論が進められている、昼間の中学と同じにという面が強調されている、夜間中学を必要としている方へ情報が届いていないのではないか。そして、夜間中学で学ぶ様々な背景もった生徒のニーズへの配慮が必要であり、複数担任制や多様な生徒に対応できる体制の確保が不可欠であると訴えた。

・西和自主夜間中学：山本直子（西和に夜間中学をつくる会　事務局長）。山本は、まず、1992年６月に設立した「外国人労働者　奈良保証人バンク」のことから話し始めた。山本は、1991年に斑鳩町の町会議員になり、３期12年務めた。斑鳩町には当時最大手の人材派遣会社があり、300人位の外国人労働者が雇用されていた。多くは、ブラジル・ペルー・ボリビアといった南米系の日系人であった。労働者のほとんどはカトリックの人たちで教会のミサに通っていたが、劣悪な労働環境や突然の解雇などの困りごとが広く知られるようになった。そこで山本は仲間と共に彼らの生活を援助するため「外国人労働者　奈良保証人バンク」を設立した。このバンクは、およそ人が生まれてから死ぬまでのありとあらゆる相談事への関与、在留資格等にからむ入管対応と手続きへのサポート、手続き時に必要とされる身元保証人を無償で引き受けることを主な活動とした。この活動を通じて、増え続ける外国人労働者とその家族の生活のための日本語支援が大きな課題と認識されるようになり、このことが自主夜間中学に携わるきっかけとなった。

自主夜間中学の運営や広報活動を行う「西和に夜間中学をつくる会」の結成総会が1998年４月に開催され、同年５月に西和自主夜間中学が開校した。西和自主夜間中学の運営面で特徴的なのは、官と民が協力する形で開校したことである。「つくる会」は交通の便などから王寺町教室の提供を要請。斑鳩町と王寺町の両町長の理解と協力のもと、王寺町が中央公民館を無償で貸すことを決めたため開校が可能となった。

現在、奈良県には公立夜間中学が奈良市（1978年設置）、天理市（1981年設置）、橿原市（1991年設置）に３校、自主夜間中学が大淀町（吉野自主夜間中学、1996年開設）、王寺町（西和自主夜間中学、1998年開設）、宇陀市（宇陀自主夜間中学、2002年開設）に３校ある。また、上記の６つの夜間中学とそれぞれの充実を目指す６つの運動団体で構成される奈良県夜間中学連絡協議会（1991年結成）が、年１回の総会や年数回の教育委員会との交渉、研修会など、夜間中学充実のために様々な活動を展開している。

山本は、現在、奈良県夜間中学連絡協議会の代表を務めている。2022年６月には、協議会から奈良県教育委員会宛てに「奈良県夜間中学充実のための要求書」が出された。そこでは、基本方針の具現化、自主夜中への支援、夜間中学の支援等、夜間中学校の教育充実、日本語教育の実施、夜間中学の生徒の受け入れ、夜間中学生の進路保障の７点について要求が出されている。

西和自主夜間中学は、マンツーマンを原則とする。マンツーマンでは、自主夜間中学の良さとして、決められたカリキュラムに縛られることなく、一人ひとりに合った学びが１対１で出来る。山本は、「私の先生」、「私の生徒」という関係を大事にしつつ、マンツーマンでは生徒同士やスタッフが互いを知る機会が少なくなってしまうことも踏まえ、１人の学習者と複数のスタッフ、１人のスタッフと複数の学習者の交流も大事にしていきたいと語った。

座談会の内容についてはごく簡単な紹介しかできないが、自主夜間中学を始めとする多様な学びの場の重要性、マンツーマンや一斉授業などの学習形態の良し悪し、自主夜間中学の充実発展のために行政や企業に理解と協力を求めていくこと等について活発な意見交換がなされた。

田巻氏による連続研修会報告は以上です。最後に、第19回多文化公共圏フォーラムとして開催された連続研修会当日の写真を掲載します。

今後の活動

2022年12月26日には多様な学び研究会が主催し、とちぎに夜間中学をつくり育てる会が協力して行う予定の教育相談コーナー設置と学習支援に向けた意見交換会を行いました。参加者は、田巻松雄、スエヨシ・アナ、カバレエロ優子、佐々木一隆でした。背景として、HANDSにおける学生ボランティア派遣や高校進学支援のためのガイダンスの現状と課題、とちぎ自主夜間中学の実践から感じる学習効果の限界などがありました。その際には学生の協力が不可欠であることも確認しました。

これを受けて、新年を迎えた2023年１月６日には、本研究会やHANDSの活動についての情報共有と交流を目的として、学生が企画した交流会が開かれました。HANDSで外国人児童生徒の学習支援活動をする学生、留学生、とちぎに夜間中学をつくり育てる会と多様な学び研究会の会員が参加して交流を深めました。「つくり育てる会」の協力により、多様な学び研究会とHANDS事業の連携の可能性を確認できた点で大変に有意義な情報共有が行われました。また、今年の正月にちなんで紙粘土で干支のうさぎを作り、かるた遊びもするという多国籍で多文化の交流会もあり、学生の力の素晴らしさをあらためて実感しました。

新年を迎え、2022年度も残り２ヶ月半ほどになりました。多様な学び研究会は、「つくり育てる会」や田巻松雄研究グループと協力して、今後も連続研修会を開催していきます。そして、2023年４月の本格始動をめざし、この１月から３月までを教育相談と学習支援の場開設のための準備期間に充てることにします。